慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶応義塾図書館蔵『十二月』解題・翻刻・挿絵
Sub Title	Reprint of “Junigatsu”
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.20 (2005.) ,p.154(1)- 129(26)
JaLC DOI	
Abstract	ここに紹介する『十二月』は、正式な題名ではないが、十二ヶ月の行事を、解説本文とともに、各月一場面ずつの絵を付した絵巻物である。 同じ内容の絵巻は、いくつか残されているが、あまり注目もされず、翻刻・紹介もほとんどされずにきた作品である。現在に伝わるほとんどの伝本が、江戸時代前期に制作された絵巻物であることから、おそらくは、内容の成立も江戸時代前期であると思われる。 本作品は、いわゆる物語ではないが、多く作られた御伽草子や幸若舞曲と同じような装丁をしていることから、直接の制作者は、絵草紙屋周辺であろう。おそらくは、大名家等の注文に応じて制作されたものと思われる。内容は、十二ヶ月の行事を描いたものだが、その中に説話的・物語的な内容も含まれている。成立の時代から無理にジャンルに入れるとすれば、仮名草子ということになろうか。 諸伝本は、慶應義塾図書館本以外に、チェスタービーティ図書館蔵『十二月あそび絵巻』、架蔵『十二月物語』（挿絵欠）、大阪青山短期大学蔵『月次のことぶき』等がある。いずれも題名が異なるが、題名は後に付けられたものもあり、本来の題名は不明である。実は、慶應義塾図書館本の題名も、「十二月」の下が欠けており、本来はこれに続く文字が存在したようである。 なお、慶應義塾図書館本とチェスタービーティ図書館本との簡単な比較を、拙稿「同筆同一作品の絵巻」（『むろまち』第八集、二〇〇四年三月）に記した。 慶應義塾図書館本の書誌は以下の通りである。 番号、一三二X・九三 形態、絵巻、二軸 時代、□江戸前期□写 寸法、縦三三・二糎 表紙、紺地金繍表紙 外題、「十二月」（下部欠落か） 内題、なし 料紙、下絵入り斐紙 字高、二六・二糎 奥書、なし 挿絵、上・六図、下・六図 以下に、慶應義塾図書館蔵『十二月』を翻刻する。翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「 」『 』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記

	さなかった。最後に、挿絵を各月一枚ずつ順番に掲載した。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20050000-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『十二月』解題・翻刻・挿絵

石川　透

解題

ここに紹介する『十二月』は、正式な題名ではないが、十二ヶ月の行事を、解説本文とともに、各月一場面ずつの絵を付した絵巻物である。

同じ内容の絵巻は、いくつか残されているが、あまり注目もされず、翻刻・紹介もほとんどされずにきた作品である。現在に伝わるほとんどの伝本が、江戸時代前期に制作された絵巻物であることから、おそらくは、内容の成立も江戸時代前期であると思われる。

本作品は、いわゆる物語ではないが、多く作られた御伽草子や幸若舞曲と同じような装丁をしていることから、直接の制作者は、絵草紙屋周辺であろう。おそらくは、大名家等の注文に応じて制作されたものと思われる。

内容は、十二ヶ月の行事を描いたものだが、その中に説話的・物語的な内容も含まれている。成立の時代から無理にジャンルに入れるとすれば、仮名草子ということになろうか。

諸伝本は、慶應義塾図書館本以外に、チェスタービーティ図書館蔵『十二月あそび絵巻』、架蔵『十二月物語』（挿絵欠）、大阪青山短期大学蔵『月次のことぶき』等がある。いずれも題名が異なるが、題名は後に付けられたものもあり、本来の題名は不明である。実は、慶應義塾図書館本の題名も、「十二月」の下が欠けており、本来はこれに続く文字が存在したようである。

なお、慶應義塾図書館本とチェスタービーティ図書館本との簡単な比較を、拙稿「同筆同一作品の絵巻」（『むろまち』第八集、二〇〇四年三月）に記した。

慶應義塾図書館本の書誌は以下の通りである。

番号、一三二X・九三
形態、絵巻、二軸
時代、［江戸前期］写
寸法、縦三三・二糎
表紙、紺地金繍表紙
外題、「十二月」（下部欠落か）
内題、なし
料紙、下絵入り斐紙

字高、二六・二糎
奥書、なし
挿絵、上・六図、下・六図

以下に、慶應義塾図書館蔵『十二月』を翻刻する。翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。最後に、挿絵を各月一枚ずつ順番に掲載した。

十二月　［上］

そも〳〵、正月に、門松をたて申事は、むかし、そさのをのみこと、なんかいへ、つねにかよひ給ひしとき、日暮しかは、こたんしやうらいか家に、いたり給ひて、宿をからせたまへとも、かしたてまつらさるゆへに、そのおとうと、そみんしやうらいかもとへ、いたりて、やとをめし給へは、すなはち、宿をかしたてまつりぬ。それより、年のはしめに、人のかとに、松をたつるといへり。

今日は元日の節会なれは、おほうちには、いろ〳〵のきしきをおこなはるゝなり。まつ、四方拝と申事は、とらの時に、みかと、清涼殿に出御なりて、しよくしやうをとなへ、天地四方をはいし給ひて、ねんさいをはらひ、ほうそをいのらせ給ふなり。

つきに、ひの御座に、しゆつきよなりて、とそ、ひやくさんをきこしめす。つきに、はかためのくこをそなふ。こ

のもちいひは、あふみのくに、ひきりの庄より、てうしんする也。たかつき六本をおしきにすへ、一のたいに、もちゐと大こんとたちはなとをもる也。是を、かゝみ草といへり。

家をのみ世にももちゐのかゝみ草

ささかへたるかけそうかへる

つきに、てう賀と申事は、天子、大極殿に行幸なりて、たかみくらにつかせ給ふ。はん臣、こと〳〵く、れいふくを着して、ていしやうにつらなり立て、みかとをさいはいしたてまつると、武官、まんさいのはたをふりしは、いとめてたきしき也。

庭もせに引つらなれるもろ人の

立ゐるけふや千代の初春

此時に、そうか、そうすいといふもの、二人、ていしやうにすゝみて、めてたきかすいともをは、そうすい也。

又、左義長と申は、仏法、はしめて、かんとに渡りし時、たうきやうと、せうれつを御らんせんために、左右につみならへて、やきあくる。右につめる道経は、こと〳〵く、やけうせぬ。左の方の仏経は、すこしもそこねさりしかは、さてこそ、さき長とは申なれ。「たうとや」と、はやする事は、仏法とうせんのことはりを、せうすると也。

十四日、十六日は、たうかの節会也。京中にて、男女の、こゑよく、物うたふものをえらひて、きむていにめしつとへて、としの初の、いはひのことはをつくりて、かれらに、うたひまはせらるゝ也。是を、あられはしりの、とよのあかりの節会とは申也。

［挿絵・第一図］

二月はしめのひのとの日は、しやくてんと申て、大学寮に、先聖、先師の御影をかけて、これをまつり給ふなり。

はつむまの日は、いなりのやしろのえん日なり。らく中のきせんなんによ、かの山にさんけいする事、おひたゝし。

いなり山しるしの杉をたつねきて
あまねく人のかさすけふかな
きさらきやけふはつ午のしるしとて
いなりの杉はもとつはもなし

上のさるの日は、春日のまつりなり。まつ、ひつしの日は、近衛の中、少将をもつて、ほうへいしに立らる。当日には、内侍、ならひに、上卿、弁もむかふなり。

まつりは、清和天皇の御宇、ちやうくはん元年、十一月九日に、はしめらる。春日は、四所大明神と、申たてまつるなり。しんこけいうん元年、六月二十一日、ひたちのくに、かしまの大明神、ていとにちかくおはしまして、君をまもらせ給はんために、かせきにのりて、のほらせ給ふ。御ともには、時風ひてゆきなり。

十二月七日に、やまとのくに、あへ山につき給ふ。同二年、正月九日、みかさの山に、あとをたれ給ひて、すなはち、しもつさのくに、香取の大明神、かはちのくに、ひらをか大明神、伊勢のくに、姫大明神の御もとへ、つかひを立て、このよしを申させ給へは、をの〳〵、春日山にうつらせ給ふ。

同年、十一月九日、御たくせんによつて、又、ちよくしを立られ、宮はしらふとしき、たゝうの明神を、あかめたてまつらる。第一の御殿は、たけみかつちのみこと、かしまの大明神なり。第二の御殿は、つはひぬしのみこと、かとり大みやう神也。第三の御殿は、あまのこやねのみこと、ひら岡大みやう神、四の御殿は、姫大明神、伊勢大神宮のふんしんに、おはしますとかや。

きさらきのはつさるなれや春日山

みねとよむまていたゝきまつる

［挿絵・第二図］

上のさるの日は、大原野のまつりなり。近衛のつかひ、弁内侍、むかふ事、春日のまつりのきしきに同し。こうひの、まいらせ給はんために、かすかの社は、とをきによりて、都ちかき所に、うつし奉らる也。

三月三日は、曲水のえんなり。文人とも、大内のみかは水にのそみて、きしのほとりになみゐて、水上よりさかつきをなかし、我まへを過さるさきに、詩をつくり、そのさかつきをとりて、さけをのむなり。されは、流れにひかれて、とくすくれは、手まつさえきる、なんとゝ、詩にもつくれり。

から人のあとをつたふるさかつきの

なみにしたかふけふもきにけり

又、今日、人〳〵、とうりうの水辺にいてゝ、はらへする事あり。是を、上巳のはらへと申なり。又、たうくわをもちゆる事は、むかし、もろこしに、きよふあり。つり舟にのりて、江のほとりをさしのほるに、深山のおくに、いたれり。たに川のきしにのほり、もゝのはな、おほくさかんにひらきたり。花のかけに、いほりをつくりて、男女ふうふ、あひすめり。きよふ、これを見て、あやしみて、「そも、いかなる人なれは、人もかよはぬ山のおくて、たゝ二人はあひ住そ」とけれは、ふうふ、こたへていはく、「我は、しんの代にすみしものなり。しくはうてい、みたりに、人みんをほろほし給ふゆへに、わうなんをのかれんために、我らふうふ、此山にかくれ、すてに、百とせにをよふといへとも、おいおとろふることなし。その間、しよくする事なし。花の露をなめて、よはひをのふ」とかたりけり。そのかんしよくをみれは、三十はかりにみえたりけり。きよふ、かへりて、このよしを人にかたりけれは、「是をみん」とて、きせん男女、かのみたにゝくんしゆして、これをみる事、おひたゝし。かの人をは、桃花隠士ともなつけたり。

これよりして、「たうくわは、仙薬なり」とて、世の人、しやうくはんするとかや。

もゝの花しけきみたにゝたつねいりて
思はぬさとにとしそへにける

又、今日、くさのもちをくふ事、これも、「かのしゐふかれいこんを、かうふくのいはれなり」といへり。また、には鳥をあはせて、せうふをあらそふことあり。これを、たうくわのせちゑのとり合とは申なり。

［挿絵・第三図］

卯月朔日は、御ころもかへの日なり。かもりのつかさ、さんたいして、冬の御しやうそくをてつして、夏の御しやうそくにあらたむ。御殿の御ちやうのかたひら、すゝし也。御なをし、御衣、すゝしなり。あやの御ひとへ、御はかまは、かまくらつかさより、これをてうしんす。女房たちのきぬあはせ、ひとへからきぬも、すゝし也。

たちかはるならひしなくはからころも
なつきたりとも何にしらまし

上のうの日は、太神のまつりなり。太神とは、三わの神なり。いにしへ、大物主神、いくたまよりひめのもとへ、しのひてかよひ給ひしを、しる人、さらになかりけり。かの姫、はらみ給ひしとき、父母、うたかひあやしみて、「いかなる人のきませるそ」とゝひけれは、「たれとはしらす、家のやねより来りて、我とそひふす」とこたふ。是を見あらはさんために、ぬのをるいとを、へそにくりて、はりをつけ、「かの神人、きましたらは、このはりを、裳すそにつけよ」とをしへける。女、をしへのまゝにして、あしたにこれをみれは、そのいと、かきのあなよりとをりて、せと山、よし野山をへて、みもろ山にとゝまりけり。その時にそ、大物主神とはしりにけり。そのいと、くりわけて、三わくありしかは、三わの山とは申なり。まつりは、ちやうくはんのころより、はしめられき。うしの日、みて

くらのつかひは、立らるゝなり。

中の子の日は、吉田の宮のまつりなり。ちやうくはんのころ、山かけの中納言、このやしろを、たゝ、春日大みやう神を、うつし申されけり。我御子孫に、みかと、おはしまさは、官幣をたてまつらせ給なり。是は、こうひ、姫宮のまいり給はんために、春日のやしろは、ほとゝをけれは、東山にくはんしやう申されけるとそ、聞えし。

此月は、藤の花さかりなれは、藤のえんとて、人〳〵、ふしの花のもとにゐて、歌をよみ、さけをのみ、なくさむなり。

夏にこそさきかゝりたれふちのはな
松にとのみも思ひけるかな

［挿絵・第四図］

五月五日は、たんこの節会也。六ゐふ、あやめのこしを、なんてんの御はしのとうさいにたつ。とのもりつかさ、御てんののきに、あやめをふく。みかと、ふくてんにしゆつきよなりて、せちゐをおこなはれ、くんしんに、みきを給ふ。人〳〵、みな、あやめのかつらをかけ、くす玉をひちにかく。す玉といふは、五しきのいとをもつてむすふ。これを、ちやうめいろうといふ也。是を袖につくれは、あつきをはらい、さいなんをしりそくるほんもん、あれはなり。

そのゝち、のりゆみはしまる。左右の大将、いてのさうをとる。とねり、馬にのりて、弓をいる。是を馬弓といふなり。

あつさ弓まゆみはけふそまてつかひ
あやめのねさし引かへてける

そも〳〵、けふ、あやめ、よもきをもちゆることは、もろこしに、へいしよわうと申人、その臣下をころし給ひし侍るか、そのおんりやう、たゝりをなして、あやめといふとくしやとなつて、人みんをなやまし、こくとをほろほさんと、はかり事をめくらされけるに、はかせ来りて、申やう、「しやうふをきさみて、さけに入、これをのまは、すなはち、そのとくしや、めつほうすへし」とありしかは、諸人、しやうふを引て、これを身にまとひ、又は、ささみて、さけにいれて、のみしかは、ほとなく、とくしや、ほろひつゝ、こくとのわさはひなかりける。かのとくしやのかたち、かしらあかく、身あをくして、しやうふにたり。さてこそ、此ときより、しやうふをあやめとなつけたり。

今日のうしの時に、ゑもきをとりて、くすりにもちゆれは、しるしあり。又、えもきをとりて、人をつくりて、門戸のうへにかくれは、とくきをはらふといふ、ほんもんあり。

又、ちまきをくふ事は、むかし、かうしんしに、心あしきわうしありしか、五月五日、ふねにのりて、かいしやうをわたるとて、あくふうにあふて、なみにしつみ、うせ給。そのれいこん、水神となりて、わうくはんの舟をなやましけり。これをなこめんために、まこもの葉に、いひをつゝみ、五しきのいとをもつて、これをゆひて、かい中に入けれは、すなはち、五しきのかうれうとなりにけり。すいしん、これにおそれて、そのゝちは、かいしやうをわたるふねに、わさはひをなささりけり。

又、あるせつには、そこくのくつけんか、そわうをうらみて、へきらにはなたれしとき、「世はみなえゝり。われひとり、さめたり」といひて、五月五日に、つゐにへきらの水にしつみけり。そしん、是をあはれみて、かのきにちをむかへて、まこものはに、いひをつゝみて、水に入、くつけんかりやうをまつけり。しかるに、ちやうさの人のゆめに、くつけんかかたりけるやうは、「我にたむらるところのいはひ、こと〳〵く、かうれうにむははれぬ。ねかはくは、五しきのいとをもつて、是をまとひて、あたへよ。しからは、かれにうははるゝ事あるまし」と、これによつ

て、のちに、五しきのいとにてまとひ、水に入にけり。今の代のちまき、これなり。

又、家々の門に、ふくを立てかさる事は、むかし、むくりといふものか、此くにをうははんとて、せめしとき、神いくさのあつて、かのむくりを、こと〳〵く、うしなひ給へり。されは、後の世に、そのしるしを残して、神のちからのいみしき事を、あらはさんために、人みんの家々に、ふりやくの道具をかさり侍るなり。

［挿絵・第五図］

日本に、ゆみやをまつり給ふ神〳〵は、八まん大ほさつをはしめたてまつり、かしま、かんとり、住よし、すはの明神なとにておはしますと、きこえけり。

六月十四日は、きをんゑなり。えんきにいはく、「てんちくよりきたにあたつて、くにあり。その名を、九さうとなつく。その中に、吉しやうといふ。その中に、ひとつのしやうあり。そのしやうのあるしをは、こつ天王とも申。又は、むたう天神とも申す。是すなはち、しやかつらりうわうの姫君を、みめとして、なんかいへかよひ給ひしか、ある時、日くれしかは、そのへんにて、やとをかり給ふ。そのところに、そみんしやうらい、こたんしやうらいとて、きやうたいのものあり。そみんは、家まとしくして、ひろからす。こたんは、とみさかへたるによつて、こたんか家にいたりて、やとをかり給へとも、かしたてまつらす。さるによつて、そみんか家に入て、宿をめし給へは、すなはち、かしたてまつりて、あはからを、しきものとし、あはいひを、くこにそなへたてまつりけり。てんわう、大きによろこひ給ひて、そのゝち、八はしらのわうしを引くし、八万四千六百五十四神の、けんそくの神をめしつれて、そみんか家にいらせ給ひて、『むかしのおんをほうすへし』との給ひて、ちのわをさつけ給ひけり。その夜より、天下にえきれいおこりて、人みんおほくほろひけり。こたんをはしめて、さいしけんそく、屋内にのこるものはなく、こと〳〵く、うせにけり。そみんか家内には、一人もしするものなし。天わう、かたりての給はく、『今よりのち、天

下にえきれいおこらんときは、そみんしやうらいなりといひて、此ちのわをかけしかは、その家は、さいなんをまぬかるへし』とそ、仰ける。ちやうくはん十一年、御たくせんによつて、いつものくにより、山しろのくに、おたきのこほり、やさかのかうにうつり給ふ。今のきをんのやしろ、これなり。一の社は、こつ天わう、一社は、はりさいによ、一社は、やまたのおろちなり」。

おもふことみなつきねともあさのはを
きりにきりてもはらへつるかな
あさの葉におもふことをはなてつけて
みなつきはつるみそきをそする
いにしへはさはへなしける神たにも
けふのみそきになこむとそきく

［挿絵・第六図］

天ろく三年に、まつりをはしめらる。りんしのまつりには、五位の殿上人を、みてくらつかひにむけられ、あつまのあそひなとを、奉らる事とかや。

神の代ややさかの里とけふよりは
君か千とせはかそへはしむる
ちはやふる神のそのなるひめ小松
よろつ代ふへきはしめ成けり

つこもりは、おはらひなり。十五日より晦日までのあひたに、百くはんこと〳〵く、しゆしやくもんにあつまりて、

あさの葉に、おもふことをかきて、みそきし給ふなり。そうして、川のほとりに、いくしを立て、あさの葉をおほぬさにし、あさちをもつて、人かたをつくり、おなしく、ちのわをつくり、すりぬきて、さいへなすあしき神をなこむるゆへに、なこしのはらへとは、申なり。はらへするとき、となふる歌、

みな月のなこしのはらへする人は
ちとせのいのちのふといふなり

十二月［下］

七月七夕といふ事は、もろこし、けいと云ところに、ゆふしはくやうといふ夫婦の人ありけり。二八三四のとしより、かいらうのちきりをなしけるか、もろともに、月をあいして、夜もすから、とうろうにさすらひ、せんほうによちのほるなとしけるか、おつとは百六、女は九十九なりしまて、めてたきは、この世にて、月にあいちやくせしゆへに、天上のくわをえて、けんきう織女の二星と成たり。

しかれとも、あまの川をへたてゝ、あいするゆへに、としに一夜のちきりなりといへり。たなはた、あまの川をわたりて、ひこほしのもとへいたるとき、うしやく来りて、つはさをならへて、しよくちよをわたすといへり。さてこそ、「うしやくのはしのもとに、こうえうをしき、二せいのやかたのまへに、かせ、れい〳〵たり」なんとゝ、かんしよにもしるしたり。

けいやうしやうのふていといへる人は、せんしゆつをえたりしか、七月七日の夜、織女、あまの川をわたりて、けんきうのもとへいたれるを、まさにみたりと、その身にかたりしとなり。ことさら、ふしんは、この七夕をまつりて、

思ふことをいのり候へし。いろとりたるいとをよりて、七くのはりにとをし、さほのはしにつけて、てい中にそてをき、つくえのうへにくわくはをそなへて、よもすから、てんをまもるに、銀の河に、ゑき〳〵たるはつきたちて、五しきのひかり、かゝやくをみて、これをはいして、思ふことをいのるに、あるひはなをこひ、あるひは妻をこひ、又はとみをこひ、いのちをこふる事は、かならす、かなふといへり。

たれも又けふたなはたをまつりつゝ
いのるこゝろは空にしるらん
中〳〵にうらやましきはたなはたの
たえすあひみる契り成けり
さしもやはとしに一たひ渡すへき
おもへはつらしかさゝきの橋

十四日は、うらほんなり。むかし、さいめい天皇の御とき、あすかてらに、しゆみせんのかたをつくりて、はしめて、うらほんゑをまうけられしなり。又、しやうむ天皇の御宇、天平五年七月に、大内にて、これをゝこなはれし也。これよりのち、しよししよさんにて、うらほんゑをゝこなへり。

これは、ほとけの御てしに、もくれんそんしやと申人、しんつうをえて、六道をあまねくめくり給ふ。その母の、かきたうにおちて、くをうけ給ふをみて、なけきかなし給ひて、ほとけの御まへにまいりて、「いかにしてか、此くをすくひ侍るへき」と、こひたてまつられしとき、仏、の給はく、「七月十五日に、ししの僧をくやうせは、けたつをうへし」と、しめし給ひしによつて、このうらほんゑをまうけられけるよし、うらほん経にとかれたり。

さて、十五日の夜、人のいゑ〳〵のかとに、とうろうをかけならへ、火をともす事は、てんていへ手向るなり。今

夜、てんてい、下かいにくたりて、人けんのせんあくをしるし給ふゆへに、上下、万民、なんによ、ふうりうをつくし、おとりといふ事をなして、いさみよろこふも、ひとへに、うれへをわすれ、あくをしりそけんためなりとそ。今の世までも、いつ〳〵のうらくまで、をこなはさるはなかりけり。

［挿絵・第七図］

十五日は、八まんのはうしやうゑなり。上けいは、さいしやうの弁、六えふなとを、おとこ山にむけらるゝ。はうしやうゑのおこりは、むかし、けんしやう天王の御時に、つくし、ひうかのくにのにんみんら、ちよくをそむくこと有しかは、宇佐の宮のかんぬし、せんしをかうふり、いくさをおこして、かれとたゝかひをなし、こと〳〵く、是をうちほろほしけり。

その〻ち、うさの宮の御たくせんに、「かせんのあひた、おほくの人をころしぬれは、はうしやうゑを、をこなふへし」と、の給はせしによつて、まい年、くに〳〵にて、是をしゆせらるゝとなり。まことに、いけるをはなつ、御ちかひのいみしきことは、さいせうわうきやうにとかれしことくに、そのくとく、ふかゝるへし。

八まん大ほさつと申は、にんわう十六代のみかと、おう神天わうにおはします。御在位四十八年、御とし百十一さいにて、ほうきよなりぬ。その〻ち、きんめい天わうの御ときに、神とならせ給ひて、つくし、ひこのくに、ひしかたのいけに、あらはれ給ふ。

その〻ち、又、ふせんのくに、うさの宮に、うつらせ給ふなり。ちやうくわんのころ、大あんしのきやうけう法師、うさの宮へまいりしとき、御夢のつけありて、かのそうにのりうつり給ひて、今のおとこ山、はとのみね、いはしみつに、うつり住せ給ふなり。かのきやうけうのけさのうへに、みたの三尊のかたちをけんして、くわうみやうかくやくとして、うつらせ給ひけるとなり。

［挿絵・第八図］

いはし水きよきなかれのたえせねは
やとる月さへくまなかりけり

今夜は、明月の夜なれは、みな人、月の名所をもとめて、月をなかめ待、歌をつらねて、心をなくさめ、しゆえんに、けうをもよほしける。月の名所おほしといへとも、みやこちかきあたりにては、ひろさはのいけ、すくれたりとて、人おほく、かのいけのみきはにそ、あつまりける。

十六日は、こまひきなり。今日は、しなのゝくに、てしのまきより、御馬六十ひきをたてまつる也。みかと、なんてんにしゆつきよなりて、是をゑいらんなる。しやうけい、ちんの座につきて、けもんをそうす。さいしやう以下の人〳〵、けんれいもんのまへのしやうしにつきて、御馬を給はる。ことはてゝ、三はいす。とりのこしの御馬をは、引わけのつかひとて、近衛つかさをもつて、ゐん宮なとへ、奉らるゝとき、ろくをいたさる事ありとそ。

引こまのかけをならへてあふさかの
関路を月もこゆるなりけり

九月九日は、ていやうのせつくなり。きくの花のえん、おこなはる。みかと、なんてんに、しゆつきよなりて、くんしんに、きくのさけを給はるなり。御ちやうの左右に、くみのふくろをかけられ、御前に、きくのかめをゝかる。人〳〵みな、くみのふくさをおりて、かしらにさしはさみ給ふ。今日、くみをもちゆることは、ひちやうはうといへるせん人か、くわんけいにをしへしゆつよりおこれり。くみのふさをかしらにさせは、あつきをはらふといふ本文あれはなり。

又、きくをしやする事は、ほうそといへるせん人、菊の花をふくして、七百さいをたもちしか、そのかたち、とう

しのことしといへり。なんやうけんのきくのもとになかるゝ水なり。きくの露の下たるゆへに、そのなかれをくむもの、三十余家、みなこと〳〵く、上しゆをえたりと聞えけり。

けふことに菊をくすりとする人は
ちとせのなかはすくといふなる

十一日、れいへいと申て、伊勢太神宮へ御手くらをたてまつらせ給ふ。まいねんのことなるに、れいへいと申なり。伊勢太神宮と申は、内宮、てんせう太神宮、外宮は、とようけ太神宮なり。是は、くにとこたちのみことにておはします。

むかし、しゆしん天わうの御時、てんせう太神、やまとのくに、かさぬひのむらに、あまくたり給ふ。みかとのひめみこ、とよすき入ひめのみことをもつて、いそかたきに、ひもろきを立て、いかひめのみことをはなれて、やまとひめのみことにつきて、の給はく、「神風の伊勢のくには、すなはち、とこよのなみの、しけなみよするくになり。このくに、おらんと思ふ」によつて、太神のをしへのまゝに、伊勢のくに、わたらへのこほり、うち川の上に、やしろをいはひて、ちんさし給ふ。今の内宮、是なり。此川をみもすそ川と申事は、やまとひめのみこと、この川にて、御もすそをあらひ給ひしによつて也。又、川上に、五十鈴あるゆへに、いすゝ川とも申也。

其のち、四百八十四年を過て、ゆうりやく天わうの御時、たんこの国、よさのこほりより、とようけ太神宮、田の原にいはひ奉る。今の外宮、これなり。

あまてるや内外の宮のくもりなく
はくゝみまもる御代はよろつ代

此日、みかと、神祇に行幸あり。

［挿絵・第九図］

さいしゆ、中臣、いんへ、うらへなと、このところにまいりて、みてくらをうけとり、東門より出て、伊勢路にむかふ。これは、しゆしやくゐんの御時よりそ、はしめられける。同しき日、としこい、かんなめのまつりあり。

十五日は、花しつめ、さいくさ、あいなめ、たましつめ、みあいのまつり也。

十月には、かもりのつかさ、夏の御座をてつして、冬の御座をくふす。今月は、いつものくに、大やしろのまつりなり。神〳〵、このやしろにまいりあつまり給ひて、くに〳〵には、神おはしまさぬゆへに、神無月と申なり。

かのくにゝ、かみありのうらといふところあり。わらはのつくれることくなるさゝ舟、おほくなみにうかひて、このうらになかれよる。これ、すなはち、神〳〵ののり給へる御ふね也とそ。

又、ふろうさんといふところに、神ありのやしろとておはします。これは、てんそうの神なり。しよしん、この神ありのやしろに、まいりあつまり給ひて、大やしろへはまいり給はす。大やしろは、そさのをのみことにておはします。きつき大みやう神と申なり。

かうあん天わう三十二年、かのへさるのとし、はしめて、いつものくにゝあらはれ給ふなり。ゐの日、みたひの、ゐのこの御わたらひいはひあり。くらのつかさより、三しゆのもちゐをそなへたてまつる。みかと、あさかれいにて、是をきこしめすなり。今日も、もちゐをしよくすれは、やまひなしといふ説もあり。又、ゐのこは、子をおほくうむものなるゆへに、女人はこの日をいはふへしといふなり。

此ころは、もみちのさかりなりとて、四方の山辺にあこかれて、しゆえん、ゆふけうをもよほさる。をよそ、もみちの名所は、みやこちかきあたりには、たかを山、あらし山、をくらの山、大井川なとにそ、歌人の詠もおほかりき。

大井川ゐせきのをとのなかりせは

もみちをしけるわたりとやみん
あさまたきあらしの山のさむけれは
もみちのにしきぬ人そなき
おほろけのいろとや人のおもふらん
小倉の山をてらすもみち葉

［挿絵・第十図］

十一月朔日には、かしはてのつかさより、いつこの御飯をたてまつる。中つかさのせう、これきをそうす。辰の日は、とよのあかりの節会也。是は、ことしのいねを神にたてまつらせ給ひて、今日あさかれいをきこしめし、臣下にも給ふゆへに、せちゑ、をこなはるゝなり。しよし、こと〳〵くすり衣のうへにをみをきて、南殿のひさしのまにまいる。

大歌所の別たう、大歌もよほし、ことにたへたるかんたちめ、さいはらなといひて、うたふなり。五せちのまひ姫のほりて、五たひ袖をかへすとそ。

今月、諸神に、しんくをそなへ、御にはにてたき火をたく事あり。是を、御ほたきといふなり。らく中のわらんへも、まなんて、道路にてたき火をして、をの〳〵、はやしたてゝ、たき火をして、氏神に手向たてまつる式なり。

［挿絵・第十一図］

十二月には、内侍所の御かくら、をこなはる。みかと、きやうかうなる。くわん人、庭火をたき、ほんまつの座さまうく。しよさ人まいりて、ふえ、ひちりきに、本末の歌、したいにひやうしをとりて、うたふ也。一条院の御時よりそ、はしめられける。

寿永のみたれに、ないしところ、さいこくにわたらせ給て、三ケ年をへて、みやこへかへり入給ひしときは、みかやの御かくらあり。これをへつして、りんしにをこなはれしなり。

大かた、かくらのおこりは、天せう太神、あまの岩戸をさして、こもり給ひしとき、天かした、とこやみになりけれは、諸神いのり申されけるに、あまのうすめのみこと、正木のかつらをかつらとし、日かけをたすけとして、うたひまひたまひし。いにしへより、はしまれる事なれは、わかてうのふうそく、神代のえんきたに、ことんなるへきにや。

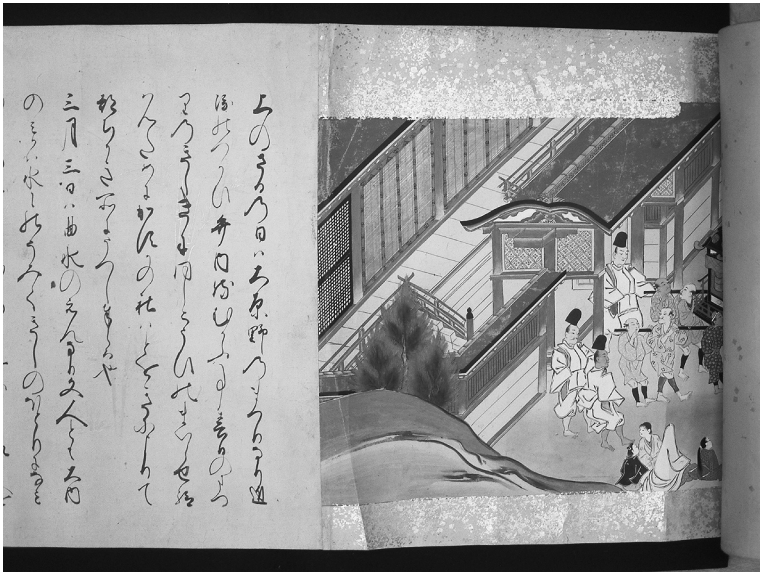
あさくらのこゑこそそらにきこゆなれ
あまの岩戸はいまやあくらん

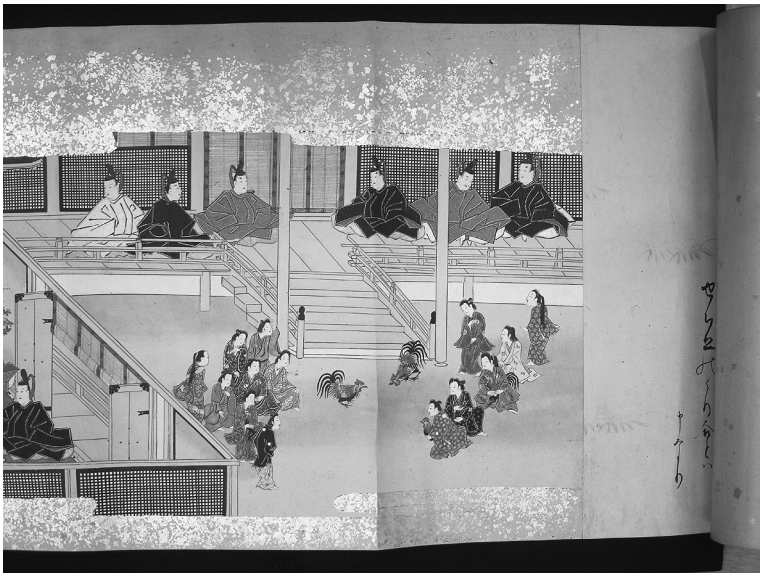
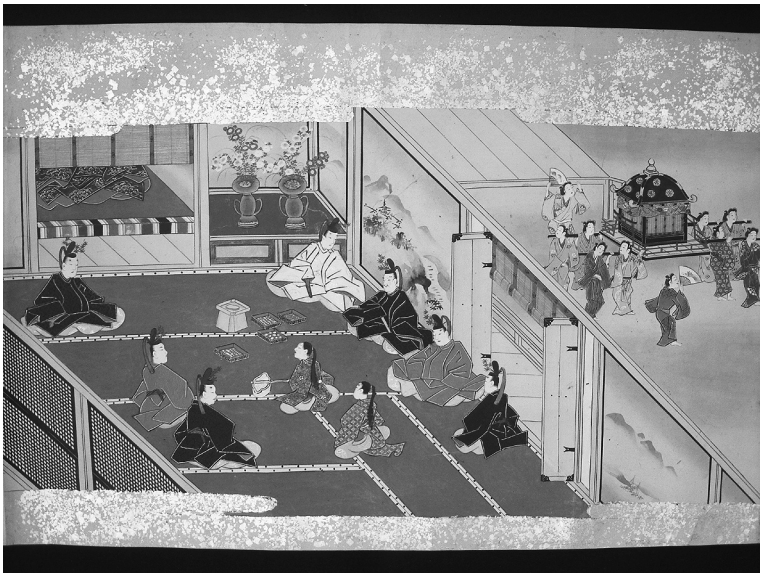
又、らく中には、春をまちうけ候とて、吉日をえらひて、すゝはらひなとし、又、わくはへ、下らう、たかきもいやしきも、あら玉の春をむかへて、いはひ侍らんとて、市町へ出、いろ〳〵のそれ〳〵のけいをつくしけるとかや。

つこもりの夜は、ついなの節会なり。大舎人つかさ、おにやらひ、四目あるおそろしきめんをきて、手にたてほこをもち、小わらはへとて、こんの布衣きたるもの、二十人を引つれて、たいりの四門をまはるなり。おんやうのつかさ、さいもんをもちて、南殿のほとりにつきてよむ。上卿以下のくきやう、これをおふ。殿上人ともは、御てんの方にたつて、もゝのゆみ、あしの矢にて、これをいる。せんくわもんよりいりて、とうさいをへて、たき口の所に出るなり。

今夜、東庭、あさかれい、たいはんところのみきりに、とうたいを、ひまなく立て、ともし火をおほくともす也。今夜、節折ををこなはる。しんきくはんより、あら世にこよの御あか物をそうすと、うらへの竹をとり、庭中の席上にをく。よおりのみやうふ、竹をもちてまいりて、御たけよりはしめて、所々のすんはうをとりはてゝ、みやうしゆにきりあて、かはにて御はらへをつとむ。あらたへに二へとて、二度あり。二たひはてゝ、ろくを給はるなり。

［挿絵・第十二図］





八